

Apocrypha 転生もの

裏界の鈴風

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

A p o c r y p h a コラボにつかれきった私が唐突に思いついた話を書きなぐっただけの話。

また、短編集なので連載する際は該当部分はそのままにしますが、召喚されるサーヴァントが違ったりするかもしれません。

目次

A p o c r y p h a 転生もの	とあるホムンクルスの場合	1
とある東方少女の場合	——	9
とある東方少女の場合	他視点とおまけ	19
とある黒のサーヴァントの場合	——	30

A p o c r y p h a 転生もの とあるホムンクルスの場合

それは、たった一つの異分子が原因だった。

例外に例外を重ね、東欧・ルーマニアにて執り行われた聖杯大戦。そう七騎と七騎、そして二人のルーラーを加えた十六ものサーヴァントたちによる血で血を洗う激しい死闘の末、本来ならば大聖杯はあるホムンクルスの手によって世界の裏側へ持ち去られ、終結するはずであった。

これは人が願いをかなえる物語ではない。

これは何かが狂った物語。

たった一人のマスターと七騎のサーヴァントが加わった、七騎と七騎と七騎の大戦争。

人並はずれた才能と異界の魂をその身に宿したがために、その渦中放り込まれた一人の少女の物語。

新たに加わる一陣、その勢力の名は『白』。

その身の純真を示す、穢れなき純白の色である。

(ん……あれ?)

彼女が目覚ますと、見知らぬ水槽の中にいた。

ガラス越しに見る風景に容姿が似通った少年少女が大きなガラスの水槽へと閉じ込められている光景を目の当たりにし、自身もまったく同じ状況にあるのだと理解した。

(え? うそ!? 何これ何これえ!?)

当然彼女は混乱し、ガラスをたたたくがびくともしない。

一通りたたき終えたところで、ここから脱出できないと悟る。

（OK 今私はどこか知らない場所に監禁されていて―しかも全裸―、このガラスは頑丈で私じゃ壊せない、幸いたぶんこの液体ってよく見る培養液みたいなものだと思うから餓死はしないはず、実際私呼吸できてるし）

（次にどうして私がこんなところにつて話になるけど……駄目ださっぱり思い出せない、友人と居酒屋六軒ハシゴしたところまでは記憶があるけど……ん？）

そこまで考えたところで、誰かが近づいてくる気配を感じ、他の彼らと同じように目を瞑り体の力を抜いて、保管されているふりをす

る。

彼女の前に現れたのは二人の男性。

仮面で顔を覆った男と彼を先生と慕う少年。

「前のホムンクルスでは失敗でしたね」

「では次はこれを使うとしよう」

そう指差した先にいたのは紛れもない彼女。

使う？と彼女が疑問に思うがその答えはすぐにもたらされる。

視界の端で何かが動いた。

どこか似通った人間たちが何かを台車で運んでいる。

彼らはそれをまるでごみのように扱い、荒々しくそれを積み上げる。

それは、死体だった。

今まさにここに監禁されている彼らと同じ容姿をした死体の山。

それを確認した瞬間、彼女はすべてを理解した。

なぜ自分がここにあるのか、ここはどこなのか、そして自分は誰なのか。

二人が去り、演技をやめた彼女は両手で自身の体を抱きしめる。

（ああそうだ、ここはルーマニア、ユグドミレニアの居城、黒陣営の拠点じゃないか、そして私は、私はサーヴァントを十全に運用するための生きた電池、いずれは使い捨てられる消耗品のホムンクルスじゃないか！）

それを理解した瞬間、体が震える。

さっきの仮面の男、アヴィケブロンが言った“使う”とは、文字通り材料に使われるということ。

このままではすぐそばにまで迫り来る自信の運命を理解した彼女の行動は早かった。

(……よし、落ち着いた、ゆつくりと魔術について考えるだけで何をどうしたら魔術が使えるのかがはつきりわかる)

彼女が右手を見れば、そこにはまるで血管のように淡い緑色に光る幾数のラインが浮かび上がっていた。

(さすがはホムンクルス、魔術の知識があつて助かった)

——シュトラセ／ゲーテン 理導／開通 ——

彼女がガラスに触れると、触れた部分から幾重にもひびが入り、粉々に砕け散ってしまう。

「脱出、成功……ああでも、これは——」

水中にあつた浮遊感が消え、彼女の体にひどい倦怠感と重力がその身に押し掛かる。

いままで歩いたこともないホムンクルスの体に加え、出力を抑えたとはいえ魔術の行使がその虚弱な体には重すぎる負担となつた。

「いそが、ないと」

早く逃げなければ誰かが自分を発見してしまう、そう思って彼女は必死に体を起こし、その場から逃亡する。

(外はだめ結界に引つかかる、どこか人目のつかない場所へ、早く!)
力の限り、彼女は歩みを続けた。

人の気配がすればその身を隠し、遠ざかるまで息を殺した。

全身を襲う疲労感と倦怠感、まるで体中を何かに蝕まれているかのような痛みに耐え、彼女は進む。

(……ここは?)

そうして彼女が到達した場所は、大きな一室だった。

そこは数日前にユグドミレニアのマスターたちがサーヴァントを召喚した儀式場にほかならない。

(最悪、よりもよってここに出るなんて！　こんな目立つところじゃすぐに見つかる、はやく別の場所へ)

そう考え、引き返そうとした彼女の耳に数人がこちらへ向けて駆ける足音が聞こえる。

(もうばれたの!?　……仕方ないわね)

彼女は扉を閉め、鍵の一部を魔術で破壊する。

一時しのぎではあるが、これで少しは時間が稼げると考えたからだ。

「はや、く、逃げ!?!」

そう踵を返し歩もうとした彼女だったが、すぐに転んでしまう。

二度にわたる魔術の行使で、もはや彼女の体は限界だった。

(こんな、ところで、死にたくない)

その一身で彼女は這いずり進む。

しかし、彼女が部屋の中央にまでやってきたところで異変が起きた。

儀式場の扉が激しく破壊されたのだ。

「まさか、こんなところにいるとはね」

弱弱しく後ろを振り向けば、そこにはホームンクルスを引き連れた二人の男がいる。

(本当に最悪、サーヴァント相手じゃもう……)

例え相手が接近戦が苦手なサーヴァントだといっても、人間では太刀打ちしないのにホームンクルスのしかも生まれたてで瀕死の彼女が彼相手に逃げ出せる確立はまったくといっていいほどない。

端的に言うと、詰んでいた。

彼が一步一步ゆっくりと近づいてくる。彼女にはそれがまさに死神の足音のように思えた。

しかし、

(こんな、ところで！　死にたくない!!)

絶望とは程遠い感情が彼女の中に生まれていた。

(まだ何もしてないのに、どうして私がここに来たのかもわかってないのに、何もできないまま死にたくない!!)

瀕死の体に鞭を打ち、彼女は必死に前へ進む。

たとえそれが彼の一步より劣る距離だったとしても、彼女は前へ前へ前へと腕を動かす。

「……………これほどまでとはな」

アヴィケブロンは目の前のホムンクルスの行動に驚きを隠せないでいた。

彼女たちはただ創造主の意のままに作られ、感情なく行動し、そして使い捨てられる運命にあった。それが彼らの存在意義であり、決して変えることのできない宿命でもあったからだ。

しかし、今そこにいる彼女はどうか？

とてもただ消費されるだけのモノにはみえないし、感情がない人形にも思えない。

体は紛れもない模造品でありながら、今を必死に生きようとする一人の人間のように見えた。

しかし、彼にも諦めることのできない目標がある。

彼の宝具を完成させるための炉心となる素材が必要だった。

そして、目の前には並みのホムンクルスとは思えない逸材がそこにいる。

彼女こそ、炉心に相応しい、そう彼は考えた。

「君は僕を恨んでくれてかまわない」

彼はホムンクルスに命じて、彼女を捕らえさせる。

もはや何もできない彼女相手ならこれで十分と考えたからだ。

しかし、そうではなかった。

「ああ、ああああああ!!」

もはや感覚さえもわからないはずなのに、もう何も持ち上げる力など残ってはいないはずなのに、彼女はホムンクルスたちの腕を振り払った。

「あ、う……………ああ」

再び彼女は逃げ始める。

今を生きるため、死なないため、彼女は必死に這う。

「ホムンクルスが、どうして……………」

アヴィケブロンマスター、ロシエ・フレイン・ユグドミレニアは彼女の気迫に気圧されている。

たかが道具と見下していた物体がこれほどの執念で逃げ出そうとする様など彼は初めて目の当たりにしたからだ。

「事実は小説よりも奇なりということだろう、ただ彼女は運が悪かった」

そう言い、今度は彼自身が手を伸ばす。もはやホムンクルスでは荷が重いと考えたからだ。

近づく彼の気配を感じる。

(まだ、死にたくない)

腕を動かす。

さらに近くに感じる。

(はやく遠くに)

腕を動かす。

もうそばにいる。

(まだ腕は動く)

腕を、動かす。

そうして、彼の腕が彼女を捕らえようとしたまさにその時だった。

「死にたく、ない」

その一念が、奇跡を呼び起こした。

「なに？」

「そんな、ばかな!？」

異変を感じたアヴィケブロンは咄嗟に後ろに跳ぶ。

見れば彼女を中心に輝く四つの魔法陣。

一度使用し、再び書き直すか魔力を込め直さなくては起動不可能なはずの魔法陣が光かがやいている。

経験のあるロシエならわかる、これは英霊が召喚される前兆なのだ。

しかし、それはありえない。

ユグドミレニアのサーヴァントはすべて召喚され、黒陣営の枠はない。

宣戦布告していくばくか過ぎた時点で赤陣営もすでにサーヴァントの召喚を終えているはずだ。

時間を与えれば与えるほど自分たちが不利になることは赤陣営もわかりきっているはずなので四騎も未召喚とは考え難い。

だが、現実にはそれは起動している。

不可能であり非現実的であり、起こりえるはずのない出来事。

ロシエ自身、今見ているものさえ現実かどうかの区別がつかなかった。信じられずにいた。

「くっ」

急ぎ、彼女を確保しようとしたアヴィケブロンだったが、その手を誰かがつかむ。

「オーケー、状況はよくわかんねえが、アンタは敵だな」

筋骨隆々で、金髪にサングラスをかけた大男。

「ちよつとバーサーカー、そんなことより今はこの子をここから逃がしたほうがいいんじゃないかしら？」

「ええ、ひどく衰弱しきっています、このままだと危険だ」

その背後に彼女を抱いた紫色のローブをかぶった女性と、男とも女とも見分けがつかないような長髪のサーヴァント。

「うむ！ 思い張り切ってみたものの、いざ召喚された途端奏者が死んでしまったては意味がないからな！」

そしてその中央に白いウエディングドレスのような衣装に身を包んだ金髪の美女。

人目見ただけでわかる。

彼らは人間ではない。そのような矮小な器に収まるモノではない。「四騎のサーヴァント、だって……」

かすれる様な声で、ロシエはつぶやく。

否定したいが、彼らは紛れもなくサーヴァントだと理解した。

「君たちは一体何者だい？」

アヴィケブロンは問う。

「うむ！ 何者かと問われれば、声高々にこう宣言しよう！ 余らは赤でなく、ましてや黒でもない！ ウエヌスのごとく美しく、ディアナのような純粹をあらわすその色彩は——」

白、と彼女は宣言する。

これより、七騎と七騎の大戦は三つ巴の大戦へと移り変わり、更なる混迷を深めることとなる。

はたして、彼女を待ち受ける運命は……。

とある東方少女の場合

それは、たった一つの異分子が原因だった。

例外に例外を重ね、東欧・ルーマニアにて執り行われた聖杯大戦。そう七騎と七騎、そして二人のルーラーを加えた十六ものサーヴァントたちによる血で血を洗う激しい死闘の末、本来ならば大聖杯はとあるホムンクルスの手によって世界の裏側へ持ち去られ、終結するはずであった。

これは人が願いをかなえる物語であるが、何かがズレた物語。

たった一人のマスターと七騎のサーヴァントが加わった、七騎と七騎と七騎の大戦争。

人並はずれた才能と異界の魂をその身に宿したがために、その渦中放り込まれた一人の少女の物語。

新たに加わる一陣、その勢力の名は『桜』。

ルーマニアより遙か東方に存在する島国を表す、儂くも美しい花の色である。

どうしてこうなったのだろう。

私は再び問いかける。

そもその始まりは、私が私として目覚めたことだった。

「私は元々はこの世界の人間ではなく、いわゆる“転生”というものをしてしまった一般人、らしい。」

前世の私は高校に入学するくらいで死んで、この世界に生れ落ちた。

そうして小学校に上がるまで悠々と新しい人生を楽しんでいた私だったけど、ある日、ふと立ち寄った路地裏で、私は、それを見てもしまった。

それは夥しいほどの紅い液体を頭から浴び、一心不乱に目の前の肉塊に喰らいつく怪物がそこにいた。

目の前で行われているその光景に動けずにいると、奥から一人の男がやってきたのが見えた。

その男は何か怪物に話しかけると、その怪物が、こちらを向いた。

その恐ろしい視線に貫かれた瞬間、私はすぐそこまで迫っている自身の未来を幻視した。

死ぬ、単純明快なその事実が私の体を動かした。

転生し、合計年齢はどうに大人になっていたはずの私だったけど、情けなく悲鳴をあげ、まるでそこいらにいる小学生同じように、逃げ出した。

逃げて、逃げて、逃げて、追いつかれた。

そうして、あわやその牙が私の頭蓋を食い破ろうとした時。

私は、“目覚めた”。

今までアヤフヤだった意識が覚醒する。

不鮮明だった記憶が蘇る。

まるで長い夢からさめたかのように意識が鮮明になる。

そして、今私がすべきこと、できることを理解した。

そうなれば後はもう簡単だった。

初めて魔術回路を開けて、全身に強化を施して、そいつをボコった。ついでにやって来た男を魔力で編んだ糸で締め上げて、ゆっくりと尋問開始。

そんで聞きたいこと聞いたら丸裸にして目立つところに放置して帰った。

これが人生初の修羅場。

そして家に帰ってみれば我が家が丸ごと嫌な結界に取り込まれているという修羅場その2。

慌てて調べてみればそれは昨日今日張られたものじゃなく、少なくとも私が生まれる前からここにあったのがわかった。

それを理解すると共に、今まで自分がどんな世界で生きてきたのかを思い知らされた。

私が住んでいる世界は、平和なんて程遠い世界だということに。

まあ一端それは横に置いて、逆に言えば今まで害がなかったのだから普通に暮らす分には何も問題ないということ。

なので今日も何時もどおりに帰宅& a m p ;自室へGO。私はこれからも悠々自適に暮らすのだー。

……。

……といけたら最高だったのですけどね！

よくよく調べてみれば家の中のおちこちに変な術が仕掛けてあって、中でも入っちゃいけないと言いつけられてる地下への扉は特に頑丈にできていて、流石に無視するにも限界があったので夕食の頃に両親と姉上に聞いたのですよ。

そうしたら皆血相を変えて、解るのかだの、見えるのかだの聞いてくるので正直にゲロりましたとも。

思えばこれがいけなかったのじゃないか。その日を境に両親の、そして姉上との関係が変わっていったのは。

元々あまり教えるつもりはなかった魔術についての講義を受け、スポンジが水を吸収するかのよう知識を身に付けていく様に両親は

とても喜んでました。

……黙ってこちらを見つめる姉上をよそに。

試しに魔術を使ってみれば小さな宝石が人形サイズの白鳥になり、
両親はとても喜んだよ。

……未だに成功したことがない姉上を忘れて。

そしたら次の日以降に両親の間で私を後継者にしようかという議
案が持ち上がりました。

……恨めしげにこちらを睨みつける姉上をいないものとして。

なんといいことでしょう。このような生活が一年続いたせいでそ
こそ仲のよかった姉上が、今ではすっかり怨敵扱いしてくるではあ
りませんか。

食事に毒を盛られるのはしよつちゆうですし、この前なんて魔術で
殺しにかかってきましたよ。これが修羅場その3ですね。

いや、姉上の気持ちもわかりますよ。

姉上だって水と風の二重属性で、2000年続いたこの家系で歴代随
一の天才と言われていたのにそこにぽつとでの私とその地位を搔っ
攫っていったのだから面白いはずがありませんね。

けどさすがに寝ている間とか友達と遊んでいる時まで暗殺して来
るのはどうかと思います。

両親に相談もしてみましたけどどうやらこう言うことはよくあるら
しく、『より優秀な方に家を継がせる』、という方針だそうです。ダメ
だこの両親何とかしないと。

そんな生活に嫌気がさし、ある日私は『そうだ、旅に出よう』と思
いつき。その日の内に用意を済ませ、『探さないで下さい』という手紙
をのこして10年間住んだ我が家を離脱。かくしてわずか10歳児
による世界一周の旅が始まったのです。

それからはもう聞くも涙語るも涙の道のりで、私のアベレージ・ワ
ンという資質に惹かれた魔術師どもが襲ってくるわ、吸血鬼的な化け
物に襲われるわ、亜種聖杯戦争に巻き込まれて死にかけるわと、行く
先々で死にかけるといいう5年間を過ごして参りました。

そんな生活を避けるため、私はユグドミレニアという魔術師の一族

が治めるルーマニアのトゥリファスまで逃げのびました。

ここなら姉の魔の手も亜種聖杯戦争も起こらず一息つけると思っ
たからね。

……まあ、彼方さまには黙って侵入したので長居は出来ないでしよ
うけど。

と考えつつ工房の準備をしていた矢先、急に右腕全体がひどく痛み
だしたではありませんか。

驚いて腕を捲ってみれば、そこには通常では考えられないほどの令
呪、サーヴァントを使役する絶対命令権、が刻まれていました。その
数合計21画、サーヴァント7騎分に相当します。

過去に聖杯戦争に参加した経験からこれがどれ程異常なのかはす
ぐに理解しました。かつて存在した日本の聖杯戦争は7騎による殺
しあい、バトルロイヤル。これじゃあ一人による一人のためのぼっち
戦争開幕です。第一聖杯もないし。

なにこれと、急ぎ情報を集めてみればどうやらよりもよってユグ
ドミレニアが魔術協会に喧嘩を売ったようで、ここトゥリファスで聖
杯戦争が始まるようです。ハハ……Jesus。

なのでさっさとここをおさらばしよう思ったらなんか空気がおか
しい。

こうドツカンドツカンと危ない音が外から……ね。

いやーな予感に苛まれつつ、そろっと様子を伺ってみれば、そこに
は何度かお世話になったネクロマンサーと甲冑を着たサーヴァント
のコンビがゴーレム&amp;ホムンクルスの集団と殺しをなさって
いるではありませんか。

誰よトゥリファスは安全って言ったの、超危険地帯じゃん。……
あ、私か。

そんな風に思っている内に戦闘終了。量産品ではサーヴァントに叶
うはずもなく、ネクロマンサーもとい獅子劫界離さんの勝利。そして
空気を読まずに突撃する私。

驚く獅子劫、何故かめっちゃ敵意を向けるサーヴァントさん。

内心、『やっべ、ミスったかなあ』と思いつつもコミュニケーション

を続ける私。

そうして獅子劫さんが赤側のマスターとして聖杯戦争に参加することがわかったのでそれなら丁度良いと右腕を捲つてこの3画7セツトの令呪を見せつけて問いかけたわけですよ。

そしたら獅子劫さんも驚かれて、赤も黒も普通は3画しか令呪を与えられないと教えてくれました。うそお……。

けど今日発現したてのこれがトウリファスの聖杯戦争と無関係とはとても思えないのもう少し話を聞きたかったのですが、サーヴァントさんに睨まれたので即退散！ さつさと尻尾を巻いて撤収しました。

丸1日かけて準備していた工房を泣く泣く放棄。来て早々に家無き子になってしまい途方にくれる私でしたが、何とそこに声をかけてくれる方々が!?! ……まあさつきのホムンクルスだったんですけどね!

やはりというか当然というか、さつきのアレを見られていたらしく、そして運の悪いことに右腕の令呪のことも知られてしまい全力で私を捕らえようとするホムンクルスとゴーレムども。

こちらにもスパイダーマンよろしく糸を駆使したワイヤーアクションで逃げ回りましたが、流石は敵地というかあつさりユグドミレニアのサーヴァントの前に誘い込まれてしまいました……。

ほんとうに、どうしてこうなったのかな。

「さて、……大人しくついてきてくれると助かるのだが」

仮面の男が私に告げる。

「ウウ……」

花嫁姿の女がこちらを睨みつける。

「はは、いやあくそれはご遠慮したいなあって、ほら私ってまだ未成年だし、知らない人について行っちゃいけないってよく言うでしょ？」
ふざけ半分に軽い口調で返すも、心の中ではすごい動揺してる。

キャスターとバーサーカーって何!? バカなの!? 死ぬの!? か
弱い乙女に何でもものを差し向けるのかこの一族はあああああああ
ああああ!?

真正正銘の大ピンチ、亜種聖杯戦争に参加してまで私を殺しにかかってきた例の姉以来の大ピンチである。

手持ちの礼装でこの二人を撃退できるか? 無理無理、1騎だけならまだしも2騎は無理。私も鍛えてる自覚はあるけどサーヴァント相手に打ち合えるほど強くはない。

「では、強制的に連衡させてもらおう」
キャスターが指を鳴らせば周囲に岩でできたゴーレムが生み出される。

「……ウウウ」
バーサーカーも戦闘態勢に入り、いよいよもって詰みが見えてきたかも。

私は帽子を深く被り、視線を隠す。

撤退……無理、逃げ切れない。

迎撃……無理、実力が足りない。

……うん、なら仕方ないか。

「日本にはね、〃 転ばぬ先の杖〃 って諺があるの知ってる? まあ別に〃 石橋をたたいて渡る〃 ってのでもいいけど」

「……それがどうしたというのかね?」

キャスターが訝しげに問い返す。言葉の意味を理解していても、私
が何を思っているのかはわからないらしい。

この状況で逆転できる力は私にはない。それはれっきとした事実。
けれど、何も出来ないわけではない。

「伊達に私も! 何度も修羅場を潜ってきてないってことよ、この顔
なし仮面野朗!」

「——汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

もう、こちらの詠唱は、終わってんのよ!!

キインと、金属が金属を弾く音がする。

「ちよつと!? 召喚早々ミンチになるところだったんですけど!? 今回のマスターは何考えてこんな状況で呼んじやってくれたんですかね!?!」

桜色の髪を靡かせ、着物を纏った少女が私を怒鳴りつける。

「まあまあたまにはこういうこともあるじゃろ、それよりもな、眼前の奴らがわしらの敵ということでもいいのかのお?」

軍服を纏った黒髪長髪の少女が問いかける。

「おそらくはそうでしょう、こちらの陣営は既に揃っているようですし……私個人的には二匹ほど斬って捨て……いえ! その前になんですかその格好は!? 禁制禁制、存在がご禁制ですよ!」

学生服を纏った女性が赤面しながら声を上げる。

「いややわあ、せっかく茨木と一緒に呼ばれたかと思えばこんな牛乳女も一緒やなんて」

学生服の女を蛇蝎のごとく嫌う鬼がいた。

「フハハハ! そうだ! なんなら吾と酒呑で貴様を八つ裂きにしてくれようか!」

炎を纏った鬼が叫ぶ。

「お三方、ここはそれよりも主殿の身の安全を確保するのが大事かと」
黒髪に露出度の高い鎧兜と白装束を纏った少女が三人を止める。

「まあ、おれとトト様は好きに絵が描ければそれでいいさ」

黒い蛸のような生物を連れた着物の少女がそう言う。

合計7騎。多種多様な彼女たちに共通しているのは彼女らが人間ではないということ。

英霊、聖杯戦争に呼び出される人理に刻まれた英雄たちの影法師。

これでこちらの敗北の可能性は消え去った。
あとはこの場をさっさとやり過ごして別拠点に急がないとね！

……。

……………。

……………流石に7騎って多すぎない？ 私、てつきり1体くら
いしか呼び出せないものって思ってたけど。

ほんとうに、どうしてこうなるのかな？

とある東方少女の場合 他視点とおまけ

獅子劫と赤のセイバー」モードレッド」にとってそれらは強敵といえる者ではなかった。

こちらはサーヴァントとマスター、あちらはゴーレムとホムンクルス。実力差は明らかであり、こうなることは当然といえた。

「終わったぞ、マスター」

「応、ご苦労さん」

敵を殲滅し終え、残骸から手がかりを探そうとしたその時であった。

「やあやあこんばんわ！ こんなところで奇遇ですね」

獅子劫の人生において、彼が苦手と思う人物ランキングトップ3に入る女の声が背後から聞こえてきた。

「……………」

ゆっくりと煙草を取り出し、火をつける。

大きく息を吸い、毒の煙を肺に充満させ、気分を落ち着けてから振り返った。

「どうしてお前さんがここにいる？」

「驚きました？ いやあくお恥ずかしいことに、新しい潜伏先にトウリファスを選んだのですが、ここで聖杯戦争が起こるってつい最近知りまして、避難の準備をしていたら獅子劫さんを見かけたものから挨拶でも、と」

獅子劫は彼女のことを嫌いというわけではない。繰り返すが苦手なのだ。

「こいつは何者だ、マスター」

モードレッドが剣を向ける。

兜の下の表情を伺うことは出来ないが、英霊が目の前にいる少女の動きを髪先の動きすら逃さぬように最大限に警戒していることは、マスターである獅子劫には理解できた。

「ああ申し送れました、私の名前は東方幻といいます。獅子劫さんとは何度か取引や共闘をした仲でして」

しかし、それをまるで気づいていないかのように振舞う彼女。

サーヴァント、それもモードレッドほどの英霊が放つ気迫をもともせず振舞える人間がはたしてどれほどいるだろうか。獅子劫は再び彼女を認め直す。

(前あつた時から何も変わってねえ、相変わらず肝が据わつてるとい
うか……)

正体不明の怪物^{モンストゥルム}。それが目の前の少女についた通り名である。

齢15になる少女につけるには物騒すぎる通り名だが、彼女のことを知るものは誰も疑問に思ったりはしない。

それほどまでに、彼女の実力は他の魔術師から隔絶した高みにいるのだから。

立ち振る舞いは歳相応、いや相応すぎる^{……}。

彼女のことを知らなければただの一般人として見過ごしてしまうほどに、……いや、知っていても気を抜けば彼女を一般人と誤認してしまいそうになるほどに、彼女は自身の力を表に出さない。並の魔術師ではその偽装を見破ることは出来ないだろう。

しかし獅子劫は知っている。彼女が凄腕の魔術使いということ。

そして、彼女が三度亜種聖杯戦争に参加し、三度とも自身以外の全てを降して勝利をつかんだ聖杯戦争のベテランともいえるべき存在だということ。

宝石魔術をはじめ、錬金術、強化魔術、呪術、ルーン魔術、二元素変換^{フオーマルクラフト}など様々な魔術系統に通じ、それらを十全に使いこなすことを。

常に人畜無害を装いながら、一流の魔術師ですら気がついた時には全て彼女の思惑通りに進んでいたことが何度も確認されたことを。

故に、正体不明の怪物^{モンストゥルム}。

彼女を知れば知るほどこの怪物の前にした時、自身の首筋に死神の鎌を当てられている錯覚に陥る。

笑顔の裏で何を考えているのかわからず、どんな手段を用いてくるのか予測できず、或いは今自分がここにいるこの状況も彼女の掌の上なのか、獅子劫にはわからない。

だからこそ、獅子劫は彼女が苦手なのだ。

(事前情報にコイツはいなかったから赤側のマスターじゃねえ、黒側が外部から雇い入れた傭兵って線もあるが、……今ここで出てくる理由がない、と思いたいが)

疑惑。どこからどこまでを疑えばよいか、情報が足りず答えが出ない。

ふと横を見れば慌てた様子でモードレッド相手に彼女と獅子劫の関係や、時折自分の旅の軌跡などを交えて一方的に話している。

剣は既に降ろしているが、これが街中なら間違いなくモードレッドがいたいけな少女を脅しているようにしか見えない。

「それで、結局お前さんはどうしてここにいるんだ？ こっちは見ての通り聖杯戦争だが」

見かねて、話を戻す。

嘘かもしれないが彼女がここにいる理由を確認すべきだと獅子劫は考えたからだ。

聖杯戦争の話をしたのも、彼女がこの話に食いつくか否かを判断したかったから。

だが数秒後、彼はこの質問をしたことを後悔することになる。

「ああえつとそのことですね、……ユグドミレニアが管理するところならいい加減静かに研究できるかと思いい、ここに勝手に工房を作らせてもらったのですが、先日こんなものが腕に浮かび上がっちゃって、ここで起きている聖杯戦争と何か関係があるのかと思ひまして」

そう言って、右腕をまくる。

暗い夜だったことと彼女が長袖を着ていたことから目立たなかったが、こうもすれば嫌でも解る。

「な!?!」

「なんだと!?!」

彼女の手の甲から上腕にかけて、とても一人一人に与えられる量ではない数の令呪がそこに刻まれていた。

(贗物、じゃねえ、間違いなく本物、……だがこの数は何だ!?)

異常、その一言に尽きる。

令呪は一人のマスターに3画ずつ、これは聖杯戦争のルールであ

り、それに則るなら腕に刻まれた21画、つまりはサーヴァント7騎分ということになる。

並みの魔術師では間違いなく持て余し、最終的には放棄するか、はたまた奪い殺されるかという劇物。

まず第一に7騎ものサーヴァントを従えられる魔術師なんて存在しない。

外部から魔力を供給する仕掛けでもあれば話は別だが、それでも7騎分の令呪がたった一人に宿るなんて話は聞いたことがない。

また、それら全てが聖杯大戦に参加するための令呪とは限らない。どこかに別の聖杯を用意し、一人だけで聖杯戦争を起こそうとしている可能性もある。

だがしかし、もしそれが、本当に聖杯大戦用の令呪だとしたら？

それではまるで――

(まるで聖杯自体がコイツの勝利を望んでるみたいじゃねえか……)

考えたくない可能性が頭をよぎる。

仮に7騎のサーヴァントを使役可能な魔術師がいたとして、そいつを勝利させたければどうすればいいか？

答えは簡単だ。絶対に勝てるように戦力を傾ければいい。

一人につき一体というルールを曲げ、そいつが使役可能な限界までサーヴァントを召喚させれば自ずと勝率は高まる。合計14騎の、いや、彼女の令呪の分を含めれば21騎の聖杯大戦に参加するサーヴァントの内、三分の一を手中に収めることが出来たらな、それは彼女一人で赤黒両陣営と渡り合えるということを意味し、例えどのようなサーヴァントが召喚されようとも獅子劫たちがこの聖杯大戦で勝利する可能性がグンと縮まったと理解するのに時間は必要なかった。

「あっちイ!？」

何時の間にか火がフィルターまで及んでいたようで、熱さから獅子劫は煙草を離してしまふ。

「え!?! 大丈夫ですか!？」

「ああ、少し熱傷したただけだ……」

心配そうにこちらを覗き込む彼女。

事実火傷は大したことはないが、獅子劫にとってこれはある意味幸運だったといえる。

(落ち着け、逆に言えばコイツを引き入れれば黒陣営に確実に勝てるってことになる。ならこっちが不利にならない情報を与えて今は敵対しない方がいいはずだ)

不意のアクシデントによって、冷静さを取り戻した獅子劫はそう結論付けた。

「この聖杯戦争は聖杯大戦と呼ばれる、通常7騎のサーヴァントの殺し合いが、黒の7騎と赤の7騎の陣営に分かれての全面戦争になっている、赤のマスターは魔術協会から、黒のマスターはユグドミレニアの一族から選抜されてるらしいが、通常3画の令呪が21画もあるところを見るに第三陣営の可能性が高いな」

はわあく、と気の抜けた返事をする彼女。

「いきなり7セットも変だと思いましたが、そんなことになっていたのですね〜」

繁々と自身の令呪を見つめる彼女。

あたかも今知ったばかりという風を装う彼女に、言い知れぬ不気味さを感じる獅子劫。

「ああそうそう！ ついでに聞いておきたいんですけど、そちらの女性の方はセイバーでいいのでしょうか？」

一瞬、空気が凍った。

何故彼女がモードレッドの性別を知っているかについては問題ない、なにせ先の戦闘を行うまではずっと素顔をさらしたままだったのだら、戦闘前に獅子劫らを目撃していれば解ること。

ただ問題は、モードレッドを女扱いしてしまったこと。

彼女は女性扱いされることを嫌い、一度自身のマスターにも警告しているほどだ。

「……………おこ」

焦り、急ぎモードレッドを見るが獅子劫の予想に反して彼女は不動

のまま佇んでいた。

いや、よく観察すれば剣をもつ手に力が入っているし、彼女から放たれるプレッシャーのようなものも増していると獅子劫は感じた。

「次にオレを女扱いしてみろ、その時は容赦なくぶった斬るからな」

静かに、けれども強い殺意を込めたその言葉に幻は慌てて謝罪する。

「あややや、これはちよつと失言でしたね、次会うときには気をつけますので！ それではー」

そういつてドップラー効果をのこして去っていく彼女。

かくして、トウリファスにおいて、彼らと彼女の騒がしいファーストコンタクトは終わりを告げたのであった。

《おまけ》

深く、暗い森の中、彼らは互いに対峙する。

一方は生き延びるため、もう片方は捕らえるため。

互いに引けぬ事情がある以上、どちらかが折れるまで戦うしかない。

しかし、そこにはあまりにも理不尽すぎる力の差が存在した。

片や竜殺しの大英雄に対しシャルルマーニュ十二勇士が一人アストルフオ。

片や一流とは行かないまでも高いレベルの錬金術を修める魔術師に対し生まれたてのホムンクルス。

大英雄と英雄、魔術師と虚弱なホムンクルス。この埋めようがない力の差の前に、彼らはどうすることもできない。

「シュトラセ／ゲーエン 理導／開通！」

「な!?! Anamorph^変ism^成 Eisen^鉄 arm^腕」

並の人間に致命傷を与える魔術も、このように防がれてしまう。それどころか自身の道具が反逆してきたことを理解した彼、ゴルド・ムジーク・ユグドミレニアは怒りをあらわにする。

「この！・ ホムンクルスごときが!!」

彼は本来の命令を忘れ、鉄に変異したその拳を振り上げる。

ホムンクルスの少年はそれを避けない。いや、避ける力すら残っていない。

先の魔術を行使したせいで、もう瀕死の状態だったからだ。

(ああ、死ぬな……)

少年はただ事実だけを受け入れた。

未練はある、彼は生きてたくて逃げ出したのだからこんなところで死んでしまうなんて満足できるはずがない。

しかし、彼には何も出来ない。ただ迫ってくるそれを見つめることしか出来なかった。

やがてその拳が彼を貫こうとしたその時だった。

「おっと、それ以上は流石に見逃せないわ」

彼らの前に一人の少女が割り込んで来たのは。

「なに!?!」

ゴルドは驚く。

いきなり目の前に少女が現れたこともそうだが、何よりも自身が渾身の一撃と確信したそれを片手で受け止められたのだから。

「こんな夜更けに幼気な少年をいじめるなんて、たとえお天道様が許しても、この私が許しません！」

月明かりが彼女を照らす。

それはまるで月が彼女を祝福するかの様に美しく、幻想的に彼女を包み込む。

「アーチャー、そっちはお願い」

「了解じゃ、任せておれ」

ジークフリートとアストルフオの前に軍服の少女が姿を現す。

「すぐ終わるからの、そこから一步も動かぬ方がよいぞ」

そう言うアーチャーの背後の空間が歪み、数多の火縄銃が姿を表す。

その全てが装填、点火済みであり、彼女の指示一つで一斉に発射されることは容易に想像できた。

「さて……ちよつと大人しくしてくれろ？」

幻はゴルドに静かに言う。

「何だ、と………」

小娘にバカにされた怒りから彼女を怒鳴り付けようとして、彼は見てしまった。

常闇の深淵へ続くかのような、深く暗いその瞳を。

それを見てしまった途端、思わず腕を引き、彼女から距離をとる。

それは全てを呑み込まんとする闇、底無し黒。まるで自身すらもそれに包まれたかのような錯覚に、ゴルドは自身の体を抱きしめることで確かに自分がここに存在することで自分の存在を再認識する。

「良かった、話が早くて助かります」

彼女はそう言い、笑う。

まるでゴルド自身が自分から納得して彼女に譲ったかのように。

事実はそんな生易しいものではない。

哀れにも彼は瞳を通して覗いてしまったのだ。

彼女の實力、その一端を。

普段の彼女にそのような兆しはない。事実何度か彼女と接触した獅子劫はゴルドのような恐慌状態に陥ったことなど一度もない。

ただ、彼女の精神が不安定になった時、例えるなら怒った時や悲しんだ時などに、彼女が無意識にしている枷が緩む。

その緩みから漏れた力の一端が、彼女の怒りの先、つまりはゴルドに視線という形で叩きつけられ強制的に彼女の凶悪さを理解させられたということになる。

（あれは、何だ!? 今まで出会ったどいつも違う、ダーニツクと対面

した時ですらこんな風にはならなかった……)

体が震える、何時の間にか変成していた腕が元に戻り、全身に冷や汗が止まらない。

「えっと、ふむふむ、これは……」

治癒魔術をかけながら、ホムンクルスの分析を進める彼女。

無防備なその背中にゴルドの魔術を一撃でも見舞えば勝敗は決する。……いや、

(無理だ！ そんなのできるわけがない!!)

もはやゴルドに戦意など残ってはいなかった。

初めて対面した自身の力の全てをもってしても絶対に勝つことのない相手、同じ魔術師なのかも怪しい怪物。

これと比べるならばまだ時計塔のロードやダーニックの方がまだ人間らしいと彼は感じた。

相対的に自身の弱さ、矮小さを痛感させられる。

まるで天に聳える大樹と自身の大きさを比べるかのようなもの。比較にもならない。

「うーん、ここで助けても後2・3年の命……、ならこれの出番かな？」

彼女はポケットを探り、そして小さな石のようなものを取り出す。そして何を思ったのかそれを。

「はい、あーんしてねー」

おもむろにホムンクルスに飲ませた。

飲み込んだ途端、少年に走る魔術回路が溢れんばかりの光を放つと同時に苦しみ始める。

「ちよ!? 何してんのさ君!？」

この凶行に見守っていたアストルフオも驚愕である。

「ん? ちよつとこの子、体のあちこちが弱すぎて話にならないから中から強化してるだけよ」

「ちなみに、何を飲ませたんじゃ?」

「賢者の石の失敗作」

ほう、とアーチャーが感嘆の吐息を洩らす。

賢者の石とは錬金術に伝わる伝説上の魔石。

それを用いれば万病はたちまち消え去り、不老不死すらも可能とする伝説上の代物である。

「まあ、失敗作だからせいぜい寿命をやや延ばすくらいにしかならないし、不老不死にもなれない、……ちよつと死にくくはなるけど」
なお、やや延ばすと言っているがそれは彼女の主観であり、彼女の言う”やや”とはおおよそ30年程度ということに本人も含め誰も気が付いていない。

「さて、あとはこの子の今後をどうすべきなのかな？」

振り返り、黒陣営の者達へ問う。

「このまま返すのは論外だし、やっぱりウチが保護したほうがいい？」

そこんところどう思う、黒のライダーさんとセイバーさん？」

あえてゴールドを無視する。彼は魔術師なのだからこの子を渡してしまえば碌な目にあわないことは自明の理だったからだ。

「……」

ジークフリートは答えない。

自身のマスターから喋るなど命じられているからか、それともそれに対する答えを持たないからか。もしくはその子の命を奪いかけた罪悪感でも抱いているのだろうか、それは誰にもわからない。

「えつと、できれば安全なところに連れ出して守って欲しいな、聖杯大戦が終わるまでの間でいいから」

アストルフオはそう答える。

初めて会った人間にこういうことを頼むのは一般的に考えておかしいのだろうが、ホームクルスを救ったことと彼の勘が幻を信用できると告げていた。

「なら決まりかな、……よいしょつと」

ホームクルスの少年を背負い、彼らに背を向ける。

アーチャーも何時の間にか鉄砲を収め、彼女のすぐそばに佇んでいる。

「じゃ、近いうちに会うことになるけど、今夜はこれにて御免！」

身体強化の魔術を使い、15歳とは思えぬ速さで森の奥へ消えていく。

「後には心が限界を向かえて気絶したゴルドと、二人のサーヴァントだけが残されていた。」

とある黒のサーヴァントの場合

私には、前世というものがあつた。

日本のとある地方都市で生まれ育ち、特に事件と言う事件もなく、穏やかで平和な、なんの特異性のない一生を終えたはずだった。

しかし、人生と言うものは不思議なもので。終わりを迎えたはずの人生が再び始動するという稀有な体験をすることになった。

二度目の私はフランスのとある田舎に生まれた。

両親はおらず、私は生まれながらの孤児であつた。

しかし、私は幸運なことに二つの武器を生まれながらに手にしていた。

一つは前世の知識。幸いにもここは前世の常識が通用する場所で、その知識を頼りに食べ物をさがし、その国の言葉を身に付けた。

二つ目は今世から備わつた私の特異な瞳。どこまでも遠くを見渡すどころか過去や未来させも見通すことができるその瞳で私は生まれながらありとあらゆる災厄を遠ざけ幸運を手にすることができた。

私はこの二つの力を使い、その都市で豪勢とはいかないまでも普通に暮らしていけるほどには生活基盤と人脈を築くことができた。

しかし、何事にも限度というものがあつた。ある程度私の存在が知れ渡つてくると、まるで魔女狩りのように私の命を狙う輩がでてきた。

やれ魔女だの悪魔だの、挙げ句のはてには魔術師とか言うよくわからない輩すら出てくる始末。

幸いにも奴等を文字通り鎧袖一触にできる力が私にはあつた。いや、目覚めたというのが正しいのかな？

ともかく、奴等に殺されるほど弱く歩なかつたがこうも連日連夜刺客がやってくるとすごく気が滅入る。知り合つた数少ない同類たちに視線をやつても、どうでもいいとか、ガンバ☆とか、コヤツめww w的な失笑を込めた視線しか返つてこない。本当に役に立たないなあいつら。

仕方ないので私は旅に出ることにした。

唐突な行動だと思うかもしれないけれど、昨日転寝してしまった時に視てしまったのだ。

見るもの近づくもの全てを焼き尽くさんばかりに燃え盛る、太陽のごときその姿を。

予知に導かれ、私は火山を目指す。

北緯37度45分18.2秒、東経14度59分42.9秒。

イタリア南部、シチリア島東部にある活火山……エトナ火山。

かつての神話の時代から不死の怪物が封じられている、巨人が封じられている、とある神がここで鍛冶を行っていたなど伝説には事欠い場所である。

その火口近く、一般人の立ち入りが禁止されている場所にそれはあった。

深淵へと通じるような深く暗いその洞窟は、まるで新しい獲物を今か今かと待ち構える怪物の口のように思えた。

歩くアルクあるく。

下へ、奥へ、深淵へ、降りていく。

道中、迷い込んだ部外者を排除するような仕掛けが施されていたけれど、私の瞳の前に全ては意味をなさなかった。

そして、最奥、深淵の深淵へとたどり着き。

そこで、神を視た。

ルーマニアの地方都市トゥリファス、ユグドミレニア城付近の森林内、そこに2つの人影があった。

1人は騎士の軽装に身を包んだ女性と見間違うほど美しい美少年。

もう1人は弱々しく少し押しただけでも壊れてしまいそうなほど華奢な茶髪の少年。

「あれれ？」

「これは……」

二人は足を止め、目の前のそれに目を奪われていた。本来彼らはそんなことをしている場合ではない。

茶髪の少年、まだ名前すらない彼は人間ではない。ホムンクルスという人造人間だ。

今、このトウリファスで行われている聖杯大戦、七騎と七騎のサーヴァントを殺し合わせ勝者の願いを叶えるという儀式、ためだけに用意された生け贄、英霊という戦闘兵器を十全に運用するために魔力を絞り出され続ける生きた電池だった。

だが彼は幸運にも、……いや不運にも自身がどうなるかを自覚してしまった。

他のホムンクルスよりも少しだけ自我が強く、聡明な彼は自身が閉じ込められた円柱状の水槽の中から、その残骸を見た。

自身とそっくりな人形の残骸、ホムンクルスの死体の山である。ホムンクルスは人ではない、故に人間未満の扱いしかされない。こうして実験の失敗で死亡した彼らの扱いは産業廃棄物に対するそれではない。

彼は悟った、それが自身の未来の姿だと。

だから彼は逃げたした。

この世に生を受けたものなら誰しもがもつ単純だが何よりも強い衝動、生存欲求死にたくないに突き動かされ、彼は自らの枷を壊し逃げ出した。

途中、騎士の英霊、この場にいるライダーことアストルフオに助けられ今もなお彼の逃走を手助けしてくれている。

そんな彼らが逃げる時間を捨ててまで足を止めたのは目の前にあるその風景が余りにも異様だったからだ。

そこは辺り一面全てが炎に包まれていた。右も左も前も、今通ってきた後方ですら燃え盛る炎に阻まれている。

勿論これは彼らが自分からここへ飛び込んだ訳ではない。彼らは間違はなく森を駆け抜け、安全な街へと逃げていたはずだったのだから。

更に英霊であるアストルフオはこの炎が只の炎でないことに気づいていた。

通常の炎程度なら英霊たる彼に効果はなく、ホムンクルスの少年を抱えて走り抜ければいいだけの話。

しかし、目の前に広がるそれらは高度な神秘を秘めていて、例え英霊であろうと触れれば只ではすまないことを彼は理解していた。

「……………?」

ふと、何かが見えた気がした。

ホムンクルスの少年は炎の奥に目を向ける。

業火の向こう、揺れる炎の先に、小さな影が見える。

それは少しずつ大きくなっていき、それがはつきり視認できる距離に近づいた時、彼らは度肝を抜かれた。

「なっ!?!」

「うっそお!?!」

それは人間だった。

英霊さえも負傷させる炎をもともせず、黒い靄でハッキリとはわからないが、女性らしき人間がこちらへ歩いてきていた。

彼女が何者なのか? こちらへ危害を加えるつもりなのか? そんなことを考えている間に彼女は少年の目の前へと辿り着く。

『』

彼女が何かを言ったが、それは彼らには届かなかった。

彼女はゆつくりと彼の右手を取り、そこに自身の右手を重ねる。

『』

「——ッ!?!」

少年の右手に痛みが走る。

見ると、先ほどまではなかったはずの赤い痣がそこに刻まれている。た。

「ねえ君! それって」

「ああこれは、——令呪だ」

令呪、それは聖杯戦争の参加者のみに与えられる特別な証。マスターが呼び出したサーヴァントに対する絶対命令権。

それは1人につき3画、つまり3回まで自身のサーヴァントに命令を実行させることができる。その用途は多種多様であり、サーヴァントが好まない行動を強制することや、逆にそれを彼らが望む行動に対して後押しする形で使用し彼らを一時的にパワーアップさせることもできる。

しかし、今この時最も重要なのはそれがこの少年に宿ったということ。この少年に聖杯大戦の参加者たる資格が与えられたということである。

本来これはあり得ないこと。あるはずないこと。

敵陣営もアストルフオの陣営も令呪の配布は既に終了しており余剰などあるはずもない。

事実アストルフオもアサシンを除いた全てのサーヴァントを確認している。

その暗殺者ですら遠い異国の地で召喚に望んでいたはずだ。

まあ、そのアサシンのマスター候補が今も無事だったならの話だが。

「君は……あれ？」

アストルフオが視線を戻すと既に姿はなく。

焼け野原だった大地も元の物静かな森林へと戻っていた。

「幻覚……じゃない、確かに令呪がある、それに——」

少年に言われ、アストルフオはそこにある物に気づく。

少年の2、3歩先ほぼ目の前の位置にそれはあった。

「これって、召喚陣と剣？ 何でこんなところに……」

英霊を召喚するには令呪が必要である。しかし実際にはそれに2つほど更に必要になる物がある。

それが召喚陣と触媒である。

召喚陣を描き、側に触媒を置き、召喚の呪文を唱え、成功して初めて英霊を使役することができる。

召喚陣を描くことは簡単ではあるが、触媒を用意するのは困難を極める。

聖杯大戦の元凶たる聖杯、それは元はトゥリファスではなく日本の

冬木という街にあった。それをアストルフオの側の一族、ユグドミレニアが奪い去ったのだ。

その際、聖杯戦争の術式が流出し、世界各地で亜種聖杯戦争なるものが発生する始末。呼び出される英霊は触媒によって決まると言ってもよい、最高の英霊を呼び出すことができればそれは聖杯戦争に勝利したも同然である。その為、触媒の価値が高騰し、世界中に散逸してしまっている。

今日の前にある2つは正に触媒と召喚陣。あとは令呪があれば英霊を呼び出す準備が整ってしまっている。

そして、令呪丁度つきき手に入れている。

少年は何者が自身に英霊を呼び出すことを望んでいるように思えた。いや、実際に目にしてしまえば誰でもそう思うだろう。

こうも都合良くお膳立てがされていると、不自然極まりない。

「……………」

一歩、少年は足を進める。

「駄目だよ」

それをアストルフオは手を掴んで止める。

アストルフオは理性蒸発という特異な状態ではあるが考えられないほどではない。

今この少年がマスターとなってしまうえばもう逃げられない。マスターとして正式に聖杯大戦の一員として組み込まれ、敵陣営から命を狙われることになる。しかも、彼は味方のはずの陣営からも命を狙われる立場、故に彼はたった一騎で残り十三騎を相手にしなければならぬことを理解していた。

こうなってしまうえばアストルフオでもどうにもならない。いくらアストルフオでも自身の陣営全てを敵にして勝ち抜けるほど強くはない。むしろ弱い部類だと自負している。

「……大丈夫、召喚したりはしない、ただ他に何も無いのか気になっただけだ」

「なくんだ、それなら良かったよ」

少年の答えにアストルフオはほつと息をつく。

事実、少年はあれだけの出来事がありながらここを無視して進んで大丈夫なのか不安になっただけだった。

まあ、正確にはそんなものは必要なかったのだか。

「まったく、やっと見つけたぞ！」

少年たちの背後、森の奥から現れたのは二人の男。

ユグドミレニア

黒のセイバー、真名はジークフリート。竜殺しの逸話をもつ北欧の大英勇である。

そしてそのマスターであるふくよかな体型の中年男性、ゴールド・ムジーク・ユグドミレニア。

彼らが多数のゴーレムを率いて少年を捕らえに現れた。

「あちあ、君って人気者だね」

アストルフオは少年をかばうように前に立つ。

「……………」

同様にジークフリートもアストルフオの前に構える。

「君は早く逃げて！」

アストルフオに急かされ、少年は走るが躓き転んでしまう。

「ふん、ろくに歩けぬ欠陥品に何故キャスターは拘るのやら……………」

ゴールドは二人を避け、少年へと近づく。

アストルフオはそれを阻止したい、がジークフリートがそれを阻む。

言うまでもなく、英霊としての格はジークフリートの方が上である。アストルフオの実力では彼を突破し少年を助けに行くことはできない。

（——嫌だ）

ゴールドが一步一步、確実に近づいてくる。

アストルフオの助けは期待できない。生まれたて、しかも魔力タンクとして調節された自身の体では逃げ切ることにはできない。

死。どうしようもない結末が少年を待ち構えている。

あの男の手に囚われたが最後、何もない少年の命すら差し出さなけ

ればならなくなる。

それが、とても嫌だった。

無様に死消費されていくんでいく同類たち。彼らにも命がある、意思もある。

何故、彼らが死ななければのらないのか？

何故、自由に生きてはいけないのか？

何故、奴らは追ってくるのか？

生まれて間もない少年にはまだわからない。

しかし、だからこそ、そこに強い意思があった。

——生きたい。

——死にたくない。

——例え残り少ない命だとしても、こんなところで何もできずに死にたくない。

その強い思いが、彼女を喚んだ。

「何だ!？」

突然の閃光に目が眩む。刹那、浮遊感と共に温かい何かが少年を包む。

「OK事情は大体把握したわ、取りあえずその人それ以上こっちに近づくと焼くから覚悟してね」

誰もが突然の乱入に動きを止めていた。

二人のサーヴァントですら何が起こったのか理解できていなかった。

「?」

少年は恐る恐る目を開ける。

最初に飛び込んできたのは紅い炎だった。

まるで衣服のように炎を纏い、火傷どころか熱がる様子もない。

赤と白に彩られた修道服を思わせる服装に身を包み、白いベールで顔を隠した女性の腕の中に少年はいた。

よく見ると、先ほど少年がいた位置から少し離れていることがわかる。恐らく、彼女が少年を抱えてここまで移動したのだろう。

「馬鹿な、ホムンクルスが英霊を召喚したというのか!？」

信じられない、しかし目の前の女から感じる威圧は自陣の英霊たち

と同等、いやそれ以上かもしれない。

彼女がこちらを向いているだけでゴールドは自身の首筋にナイフを当てられているような感覚に襲われ気がでない。

「んー、それにしても寂しい場所ね、私的にはもつと温かい場所の方が好みなのだけれど」

対して彼女はそんな素振りなど微塵も感じさせず、ただゆったりと辺りを見渡している。

この場に英霊が二体いるというのにまるで眼中にないかのよう。

「さあマスター、どこへ行きますか？ 何をしたいですか？ あなたの望む場所へ、あなたの好きなようにしていいのですよ」

まるで聖女のように優しく語りかける。

「あの……」

「何ですか？」

彼女は少年の答えを待つ。

「まず、貴女の名前を教えてください」

少年がそう言うと、ああそうでしたねと彼女は呟き、改まって少年に告げる。

「申し遅れました、他者がいるこの場で真名を明かすことはできませんが、今は私のことを”黒のフォーリナー”とお呼びください」

こうして、異端者を交えた聖杯大戦が幕を開ける。

七騎と七騎の聖杯大戦、その結末や如何に。